

イチゴ‘とよのか’のランナー切り離し時期と親苗の
低温処理が子苗の開花に及ぼす影響

柴戸靖志・伏原 肇・林 三徳・*松田文枝

(福岡県農業総合試験場・*東宇和農業改良普及所)

Yasushi SHIBATO, Hajime FUSHIHARA, Misunori HAYASHI and Fumie MATSUDA :

Effects of Runner-Cutting Time and Mother Plant Cooling on Flowering

Date of Daughter Plants in Strawberry cv. 'TOYONOKA'

イチゴ‘宝交早生’の無仮植育苗では、ランナーの切り離し時期を早めることにより苗の開花が促進されることが報告されている。

本報では、隔離床を利用した‘とよのか’の無仮植育苗における子苗の開花促進技術開発のため、ランナーの切り離し時期と無仮植育苗中の親苗への低温処理が子苗の開花に及ぼす影響について検討した。

1. 材料及び方法

供試品種は‘とよのか’を用いた。

1) 隔離床育苗におけるランナーの切り離し時期が子苗の開花に及ぼす影響を明らかにするために、ランナーの切り離しを1991年8月1日、16日、9月2日及び17日に行った。親苗は1990年12月5日に露地に定植し、切り離した子苗は、本葉5枚の苗を用い1991年9月17日に定植した。

2) 夏期低温処理促成栽培におけるランナーの切り離し時期が子苗の開花に及ぼす影響を明らかにするために、ランナーの切り離しを1991年8月1日、16日及び9月6日に行った。親苗は同年6月10日に露地に定植し、低温処理は、隔離床で生育している子苗に8月16日から9月6日まで15°Cで夜冷短日処理を行った。切り離した子苗は、本葉5枚の苗を選んで9月6日に定植した。

3) 無仮植育苗中の親苗への低温処理が子苗の開花に及ぼす影響を検討した。親苗は1992年5月1日に隔離床に定植した。親苗の低温処理は、夜冷短日処理とし、子苗を切り離さずに親苗のみを同年8月17日から9月7日まで15°Cで行った。処理終了後、子苗を定植した。ただし、供試する子苗は、親苗定植後発生する第3次ランナーまでに発生した第3次子苗までとし、ランナーの節か

ら発生する苗は摘除した。

最終追肥は、1)は1991年8月10日、2)は同年7月20日、3)は親苗及び子苗ともに1992年7月20日に行った。調査は、子苗の頂花房の開花日について行い、2)は検鏡による花芽分化についても実施した。

2. 結果及び考察

1) ランナーの切り離し時期が早いほど子苗の頂花房は早く開花した。

2) 8月1日にランナーを切り離した子苗の花芽分化が最も進んでおり頂花房も早く開花した。

3) 親苗との間を結ぶランナーが枯れていない子苗は早く開花した。子苗の開花促進と親苗の花芽分化に関係は認められなかった。ランナーが枯れていない子苗を、ランナーの親苗での発生節位と子苗のランナーでの発生次数により分類すると、高節位のランナーに発生する子苗ほど早く開花したが、第2、3次子苗では高節位に発生する子苗ほど開花は遅かった。また、ランナーに発生する次数が低い子苗ほど早く開花したが、第1次ランナーに発生する子苗は異なる傾向を示した(第1表)。

以上のことから、無仮植育苗の‘とよのか’において、ランナーの切り離し時期を早めることにより、子苗を早く開花させることができた。また、子苗を切り離さずに親苗を低温処理することにより、子苗の開花を促進させる可能性も示唆された。

しかし、ランナーの切り離し時期による子苗の開花促進法は、最適時期が明らかではなく、また、親苗の低温処理による子苗の開花促進法は、苗質により効果異なるため、今後検討する必要がある。

第1表 ランナーの着生節位及び子苗の発生次数別の頂花房の平均開花日

	ランナーの着生節位						子苗別	
	低節位		中節位		高節位		平均	
a) 月	日	月	日	月	日	月	日	
子苗の	①	11 12.6±3.37	11 8.8±2.27	11 4.5±2.16	11 8.6			
発生次数	②	11 9.4±2.50	11 10.9±2.28	11 13.5±7.86	11 11.3			
	③	11 12.9±5.10	11 14.9±6.76	-----	11 13.9			
節位別平均		11 11.6	11 11.5	11 9.0	-----			

注) : a) ①: 第1次子苗, ②: 第2次子苗, ③: 第3次子苗